

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520718

研究課題名（和文） 加耶諸国各国の史的展開と諸国連合の実相に関する総括的研究

研究課題名（英文） All-inclusive research on the Historical deployment of each country in KAYA 加耶 and the real phase of countries union in KAYA 加耶.

研究代表者

田中 俊明 (TANAKA TOSHIAKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50183067

研究成果の概要（和文）：

- ①加耶諸国の実態について追究した。踏査成果および近年の発掘成果をもとに、王宮を中心とする諸国の景観を復元的に考察した。
- ②多羅国について検討した。多羅国の領域を再検討し、大加耶連盟の中での多羅国の地理的位置と政治的位相を考察した。大きな領域を擁した多羅国ではあったが、大加耶と新羅とを結ぶ結節点に位置することがその政治的位相を規定した。
- ③比自伐国について検討した。現在の中心地よりも南に大きな古墳群を残す別の勢力があり、それを下に従えた比自伐国を措定し、その新羅編入に至るまでの政治過程を追究した。
- ④いわゆる「任那の官家」および「任那四県」について再考した。ともに『日本書紀』にのみあらわれることがらであり、『日本書紀』においてどのように構成されているかを検討した。それをもとに、わたしの旧説を補完し、また「任那支配論」についても改めて否定した。

研究成果の概要（英文）：

- ①I investigated about the actual condition of KAYA 加耶 countries. I considered the scene of countries centering on a king's palace based on an exploration result and an excavation result in recent years .
- ②I examined TARA 多羅国. I reexamined the domain of TARA 多羅国 and considered the geographic point and political phase of TARA in the inside of DAIKAYARENMEI 大加耶連盟, which is the countries league made into the DAIKAYA 大加耶 leader I thought as follows. TARA is as being located at the nodal point which connects DAIKAYARENMEI 大加耶連盟 and Silla 新羅 although it had a large domain specified the political phase.
- ③I examined HIJIHO 比自火国. There is a bigger ancient tomb group in the south than the present center. I thought that it was the major nation followed by influence with such an ancient tomb group downward. And I investigated the political process until it is admitted in Silla 新羅.
- ④I thought over again about what is called "MIYAKE 官家 of MIMANA 任那" and "MIMANA 4 prefectures." Both appear in the "Nihon shoki 『日本書紀』." I examined how it would be constituted in the "Nihon shoki." And based on the result, my old theory was complemented and it denied anew also about the "The opinion of having governed MIMANA"

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1500000	450000	1950000
2011年度	1000000	300000	1300000
2012年度	1000000	300000	1300000
年度			
年度			
総計	3500000	1050000	4550000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：加耶史、加耶諸国連合、大加耶連盟、加耶南部諸国、多羅国、比自火国、「任那の官家」、「任那四県」

1. 研究開始当初の背景

わたしはこれまで大加耶を中心とする加耶諸国連合である大加耶連盟というものを措定し、それを中心とした加耶史の展開（『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館）、および金官国を中心とする加耶南部諸国の史的展開と倭国との関わり（『古代の日本と加耶』山川出版社）についてまとめた。それを前提として、そこで扱うことのできなかった他の地域の問題、あるいは他の地域（倭国も含む）とそれらとの関係について、より詳細に検討する必要があると感じた。

大加耶連盟・加耶南部諸国連合、という概念はわたし独自のものであり、本研究は、その延長上において、自分として残る課題を追究し、自らの考えをより深める、という意図をもったものである。そのように、いくつかの諸国連合を想定して、その変遷過程を追うことによって、加耶史の動的な把握が可能になったのであり、本研究ではそれを強化したいと考えている。金官国・安羅国は、加耶南部諸国連合に属する国であり、大加耶国・多羅国は、大加耶連盟に属する国である。それら各国史の詳細を考察することで、連合におけるそれぞれの役割もいっそう明確になると考えられ、それぞれの連合体の実態がどうであったかについて、いっそう詳細に知るための有効な方法であると考えている。いっぽう比自火国は、それ自体の検討もさることながら、それを中心とする諸国連合の存否を模索するものである。加耶史の史料は、くり返し述べるように極めて限られており、文献的にそれ以上の追究を進めるのは、容易ではないと考える。そして最後に、このような各国史・諸国連合の考察をふまえ、倭国との関係についても再検討するが、それもすでに示している見通しに沿って、特に韓国の研究者の意見に対して、批判的に整理・検討するものであり、終局的な段階といえることができよう。

本研究を通して、加耶史の体系的理解が進むことが期待でき、その結果は、いっそう明確に、学界に対して寄与することができるものと自負するものである。

2. 研究の目的

加耶諸国とは朝鮮半島南部において、3世紀末から6世紀なかばまで興亡した小国群を指す。3世紀の辰韓・弁韓の中からいくつかの国々が発展し、時に連合しながら、百済・新羅と対抗し、最終的に、百済・新羅に分割されてしまう。海をはさんだ倭とも交流関係があり、倭国の国家形成にも大きな影響を与えた。わたしは、1988年以來、加耶諸国に関する研究を進め、『韓国の古代遺跡2 百済・伽耶篇』（中央公論社、1989年、東潮との共著）・『大加耶連盟の興亡と「任那」』（吉川弘文館、1992年）・『古代の日本と加耶』（山川出版社、2009年）および20篇の論文を発表してきた。特に『大加耶連盟の興亡と「任那」』では、大加耶国（高靈）を中心とする諸国連合（わたしはそれを大加耶連盟と名付けた）の存在を措定し、その成立・構造から、百済・新羅との抗争を経て終焉に至るまでを詳細に論じた。それは韓国における加耶史研究の第一人者といえる金泰植の成果に導かれながらも、加耶全体が前期・後期と2段階（5世紀初頭を前後する2時期）において、それぞれ全体をひとつとする連合体を形成していたという彼の考えを批判して、後期において、その一部の国々のみが参加する連合体、大加耶連盟について明らかにしたものである。それは日本古代史における、朝鮮半島進出をめぐる問題とも関連し、従来、加耶全体が倭国と深い関わりがあったかのような理解に対して、諸国をいくつかのグループに分けてとらえるべきであり、大加耶連盟の諸国は倭国との関係が微弱な国々であり、倭国と深い関係があったのは加耶南部諸国であ

ることについても詳論しており、いわゆる「任那日本府」論に対しても、解決への一定の見通しを示した。日本の学界では大きく支持を受け、韓国の学界でも考古学研究者を中心にして、多く賛同していただいている。ただ文献史学の研究者は、金泰植説をほぼ祖述しており、依然として意見が対立する状況である（白承玉・白承忠・李永植・南在祐など）。その後わたしは、前期について、『古代の日本と加耶』において、倭国と関わりの深い加耶南部諸国連合（金官国を中心とする諸国連合）の展開について、およびその倭国との関係を詳論した。このようなこれまでの研究をふまえて、これから進めるべき課題として、各国史の展開自体、特に、大加耶国・金官国（金海）・安羅国（咸安）・多羅国（陝川）など主要国のそれ自体の推移と、上記の連合以外の諸国連合について、例えば比自火国（昌寧）を中心とする連合などがどうであったのかについて、研究を積み上げて、わたしなりの加耶史研究を総括したいと考えている。特に次の点に注意をしつつ検討していきたい。

(1) 加耶諸国のうちの主要な国、大加耶国・多羅国・金官国・安羅国の歴史的展開を、限られた文献に加えて、地方誌の地名資料や考古資料などをもとに、できるかぎり再現すること。

(2) それを通してすでにわたしが大加耶連盟・加耶南部諸国連合と名付けている諸国連合におけるそれらの国々の位置づけをいっそう明確にし、相互の関係を動的に把握すること。

(3) また比自火国については、同様にその国自体のあとづけをするとともに、周辺の小国との関係に注意しつつ、その文化圏・政治圏を検討し、それを中心とする諸国連合の存否について検討すること。

(4) そしてそれら全体の成果をふまえて、あらためていわゆる「任那日本府」論を、批判的に検証すること、等を目的とした。

3. 研究の方法

全体として、限られた史料の詳細な分析と考古学的成果との総合をめざすものである。

(1) 「駕洛国記」という残された貴重な史料を綿密に検討し、伝承地の踏査や地方誌の地名を蒐集・吟味し、さらに考古学的成果をもふまえて金官国の実像に迫る。

(2) 安羅国・大加耶国・多羅国を踏査する。それら諸国には、適当な文献はないが、同様に地名の精査と考古学的成果をもとにして、その歴史的展開に迫る。その上で、すでに公表している、大加耶連盟・加耶南部諸国連合という諸国連合におけるそれぞれの国の役割や、連合の性格を検討する。

(3) 比自火国をとりあげて、同様に検討するとともに、連合体を想定できるかどうか

について考える。

(4) 全体の成果をふまえて、あらためて日本との関係を考察し、いわゆる「任那日本府」論の最近の動向を批判的に検討する。

4. 研究成果

(1) 加耶諸国の実態について、踏査および近年の発掘成果を整理し、景観を復元的に考察した。時に王宮の位置問題である。これまで加耶諸国においては王宮が確認された例がない。金官国の場合、鳳凰台周辺から土城が確認され、5世紀を前後するものであることがわかった。そもそも鳳凰台は、紀元前後に環濠がめぐらされており、聚落があったところで、王墓（大成洞古墳群）との位置関係からもその中に王宮があったことは十分想定できる。加えて新羅が領有し、金官小京を置いたが、その小京城とみられるものも検出されはじめ、それは鳳凰台を大きく囲むものであった。中心地が動いていないことがわかる。このような王宮の確認と周囲の状況の復元は、多羅国でも一部可能になった。それは玉田古墳群に近接する城山土城の発掘による。このような「加耶の王宮」の文献的理解と考古学的成果をまとめるかたちで考察を加えた。これは「加耶の王宮」と題して発表する予定である。すでに口頭発表はしている。

(2) 多羅国について、まず領域について考察した。新羅が滅ぼしたあと、それまでの中心地とは離れたところに大耶（＝多羅）城を築造し拠点とする（陝川邑）。それは新羅の統治策であり、それまでもそこまで多羅国であったことを意味する。多羅国の王陵群とみられる玉田古墳群の近くに草溪という町があり、草八国の中心であったと見られながら古墳群がないため、玉田古墳群こそが草八国の王陵群ではないかという意見もあったが、同様に新羅になって中心を移したのがその地であり、草八国時代には陝川邑の南に中心地があったと考えられる。このように隣接する他国についても考えて多羅国の広がりをとらえ、そこがもつ地理的条件を考察すれば、新羅と大加耶連盟との結節点となる交通の要所を占めていることが改めて確認できる。そのことが多羅国の大加耶連盟の中における存在価値である。政治体として大加耶を越えることはなく、それに準じる存在であるが、そうした役割のために第二の国となったのである。これについては、11月刊行の『多羅国と玉田古墳群』（仮題。慶尚大学校・陝川郡）に「復元多羅国」というタイトルで発表することになっている。

(3) 比自火国について、昌寧邑の校洞古墳群は王陵群であるとみてよいが、下位の集団の大きな古墳群が桂城およびさらに南の霊山にもあり、それらを押さえた首長であり、

そうした大きな領域をもっていたことも考える必要がある。比自火は比較的早くに新羅化するが、それでも六世紀になってからのことであり、その新羅の進出過程を考察し、比自火の滅亡をとらえた。これは以前に発表した「新羅の加耶進出と比斯伐」を再検討したものであり、改稿して発表する予定であるが、発表先は未定である。

(4) いわゆる「任那の官家」および「任那四県」について再考した。それはすでに発表しているわたしの考えや比定地を補強するものであり、「四県」の地がいつ「官家」となったのかの考察である。すべて『日本書紀』にのみあらわれる『日本書紀』独自の構想であり、『日本書紀』自身がどのようにストーリー展開をさせているのか、という視点での追究が必要である。史実の追究問題とは大きく異なるのである。『日本書紀』の中でどのように整合的に伝えられているかがを検討すれば、「四県」の地「獲得」は神功紀四九年条の四邑獲得記事以外に考えられない。事実として認められるという意味ではなく、『日本書紀』における構想である。とすれば、すでに主張しているわたしの四県比定に問題はなく、またそのことをもとに、「官家」のもつ意味について考察し、あらためていわゆる「任那支配論」を否定した。これは、主な発表論文の図書⑩としてあげた「任那論の再検討」でもふれたことであり、全体を改稿して、『日本書紀研究』に投稿を予定している。

(5) 次項「主な発表論文等」の雑誌論文②と、図書⑩とは、百済武寧王・日本の継体期における加耶問題を扱っている。百済・加耶南部・倭の同盟関係の最終段階であり、加耶諸国が消滅に向かって大きく動いていく時期にあたっている。そこで従来のわたしの研究をふまえ、百済・倭における加耶との関係の背景となるものや、具体的な進出の問題について考察を加えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①田中俊明、正徳本(中宗7年刊本)『三国史記』の歴史学的意義、『新羅學国際学術大会論文集』、慶州市・新羅文化遺産研究院、査読無、6輯、2013、195-233
- ②田中俊明、武寧王代百済の対倭関係、『百済文化』、公州大学校百済文化研究所、査読有、6輯、2012、145-162
- ③田中俊明、百済の複都・副都と東アジア、『忠清学と忠清文化』、忠清南道歴史文化研究院、査読無、11巻2010、231-262

〔学会発表〕(計6件)

- ①朝鮮学会大会・公開講演(於福岡大学)「3世紀東北アジアの国際関係」2012.10.6
- ②百済学会国際学術大会・招請発表(於高麗大学校)「百済王敬福をめぐる問題」2011.12.3
- ③木浦大学校島嶼文化研究院・韓国文明交流研究所共催『榮山江の文明交流と生活文化史』招請発表、(於羅州リゾート)、「榮山江流域と古代日本」2011.9.22
- ④韓国・古代学会・忠州大学校共催国際学術大会、(於忠州大学校)「中原京の諸問題」2010.11.2
- ⑤世界大百済典推進委員会・忠清南道歴史文化研究院共催国際学術大会、(於公州大学校)、「百済の複都・副都と東アジア」2010.9.30
- ⑥金海文化院主催国際学術大会、(於金海博物館)、「任那」論の再検討」2010.4.29

〔図書〕(計13件)

- ①田中俊明ほか『百済と周辺世界』、図書出版チニンジン、2012.10、執筆254-264「建康の巷と百済」
- ②田中俊明ほか『狭山池の誕生をさぐる』大阪狭山市教育委員会、2012.3、執筆95-115「文字資料からみた韓国古代の築堤」
- ③田中俊明ほか『遣隋使がみた風景 一東アジアからの新視点』八木書店、2012.2、執筆88-113「朝鮮からみた遣隋使」
- ④田中俊明監修『高句麗の政治と社会』明石書店、2012.1、322p
- ⑤田中俊明ほか『弥生時代の考古学4 古墳時代への胎動』同成社、2011.8、執筆88-103「文献からみた政治史—卑弥呼時代前後の東北アジア情勢」
- ⑥田中俊明ほか『ここまでわかった! 邪馬台国』新人物文庫、2011.6、執筆43-117「『魏志』倭人伝全文を読む」
- ⑦田中俊明ほか『律令国家と東アジア』日本の対外関係2、吉川弘文館、2011.5、執筆285-304「日本・朝鮮の軍事遺跡」
- ⑧田中俊明ほか『琵琶湖と地域文化 林博通先生退任記念論集』サンライズ出版、2011.6、執筆365-377「百済の複都制をめぐる問題」
- ⑨田中俊明ほか『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、2011.2、執筆23-41「古代朝鮮における羅城の成立」1.188-207「朝鮮三国の陵寺について」
- ⑩田中俊明ほか『古代環東海交流史』1部高句麗と倭、東北亜歴史財団、2010.5、執筆71-89「高句麗と唐の対立と倭」
- ⑪田中俊明ほか『大成洞古墳群と東亜細亞』金海文化院、2010.4、執筆45-65「任那」論の再検討」
- ⑫田中俊明ほか『継体大王の時代 百舌鳥・

古市古墳群の終焉と新時代の幕開け』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 51、2010.4、執筆125-133「継体大王時代の対外関係」
⑬田中俊明監修『日本・中国・朝鮮東アジア三国史』日本実業出版社、2010.4、p.216

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中俊明 (TANAKA TOSHIAKI)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：
50183067